

## 「三世の春」の光と影

中国史上、もつとも栄えた、清朝の康熙帝（第四代皇帝）・雍正帝（第五代皇帝）・乾隆帝（第六代皇帝）三代の治世は「三世の春」と讃えられているが、表面的な観察だけでは、本当の歴史の姿は見えてこない。

歴史とは何なのか、それは、難しい問いであり、すぐに解ることではないが、今、世界で起こっている出来事や、日常生活での人間関係、また、人間そのものについての理解や、そこで起こっている諸問題の解決に、なんらかの示唆を与えられないような歴史の学習では、ほとんど、学ぶ意味がない。現代の生死を理解するために歴史を学ぶのだ、という姿勢で、過ぎ去った出来事や遺物に接していきたいと思う。書芸術の理解とは、人間の理解以外の何ものでもない。書の認識が人生観を決定する。

1661年（順治18年）、清朝第三代皇帝順治帝が、天然痘に罹り、24歳の若さで急死し、帝の第三子の康熙帝が8歳で即位した。先帝の遺命により、スクサハ、ソニン、エビルン、オボイの四人の大臣による合議制で、まだ幼い皇帝を補佐することになった。しかし、この大臣たちは利権をめぐり、互に争い合った。ソニンの死後、1667年（康熙6）オボイが他を肅清して専横を振るうようになり、順治帝の遺志は無視された。

幼い康熙帝は、オボイを憎んだが、どうにもならない。そこで、政治には無関心をよそおい、側近たちとモンゴル相撲に熱中し、オボイを油断させ、時機を待った。1669年（康熙8）6月1日、相撲視察を名目にオボイをおびき出し、見に来たところを、相撲仲間の側近たちに逮捕させたらしい。その後、オボイの一族郎党は死罪、オボイは終身刑となり獄死したという。康熙帝は15歳で実質的な皇帝親政を始めた。

康熙帝は唐の太宗・李世民と並ぶ名君と、

称えられている。61年という長い治世の間に、

三藩の乱の鎮圧（康熙20年）、台湾の支配、

ロシアとのネルチンスク条約の締結（康熙28年）

西域の外モンゴルの支配、チベットの占領など、

皇帝独裁の基礎を築いていった。また、宮廷の費用を節約し、国家の無駄遣いをやめさせ、財政に余裕を持たせて、減税をたびたび行なった。彼は向学心が旺盛で、西洋文化を愛好し、朱子学にも熱中したが、イエズス会系のキリスト教の布教と信仰の自由を認め、ヨーロッパ人宣教師から科学（数学や物理学）や芸術やラテン語をも

熱心に学んだ。そして、『康熙字典』『全唐詩』『明史』などを編纂させ、文化の発展にも大きく貢献した。

いかにも、非の打ち所のない君子のような皇帝であるが、角度を変えて見てみると、哀れで、愚かな、ひとりの人間に過ぎない姿が、浮かび上がってくる。

康熙帝は14歳で父親になり、全部で35人の皇子がいた。

最初の皇后の孝誠仁皇后は第二皇子の胤礽を産むと、産後の肥立ちが悪く間もなく亡くなった。彼は皇后を失った悲しみを慰めるかのように、皇子を溺愛し、皇子が2歳のときに、皇太子の位につけた。この時、皇帝は、まだ22歳であった。

皇太子を立派な皇帝に育てるために、康熙帝自ら読書を教え、大臣や一流の学者をつけて、英才教育を授けた。その結果、皇太子は文武両道の立派な青年に育ったかのようにみえたが、長ずるとともに、素行の悪さが目につきはじめた。彼は遊び仲間をつくって遊びほうけた。遊ぶには金がある。野心家の政治家に頼まれて、父親に取り次いでやり、うまくいったら、莫大な謝礼が届けられた。味をしめた皇太子は放蕩無頼な政治ボスに成長していった。

康熙帝は気がつかなかったのであろうか。愛は盲目といったところか。



晩年の康熙帝像



壮年の康熙帝像



青年時代の康熙帝像



オボイ像

皇太子の背後には、亡き母の叔父のソエトがいた。ソエトは皇太子を利用して大親分になっていた。

盲目の康熙帝は、皇太子の放蕩を、すべてソエトのせいにし、ソエトさえいなければ皇太子は改心すると思ひ込み、ソエトを免職し、幽閉させたが、反省の色がみえないので、1703年（康熙42年）自殺を賜った。しかし、ソエトがいなくなっても皇太子の素行は良くなるどころか、ますますひどくなった。ついに、クーデター計画の陰謀の噂が皇帝の耳に入り、ついに、1708年（康熙47年9月）皇太子を暴虐や淫乱の罪で廃位し、投獄した。廃位の宣告をし終わって、康熙帝は悲しみのあまり、泣きもだえて地に倒れたという。しかし、帝は、これを機会に皇太子が改悛してくれるかもしれないと、まだ、かすかな望みをもっていた。ところが、事態はさらに悪くなっていった。廃太子を処刑して、自分が皇太子になろうと、皇子たちが争いだしたのである。嘆き苦しんでいた康熙帝の前に、怪事件が起こった。第一皇子が廃太子を呪詛するために、まじないの人形などを地面に埋めていたことが発覚したのである。このまじないのせいで廃太子はおかしくなったのだと信じ込んだ皇帝は、廃太子がいじらしくなり、廃太子に改悛を誓わせて、1709年（康熙48年3月）再び皇太子に復位させた。しかし、皇太子の悪行は再燃し、クーデターの陰謀が現実になりそうな形勢になってきた。ついに皇帝は、1712年（康熙51年）再び皇太子を廃位し、幽閉した。廃太子は13年後、獄中で死んだ。康熙帝の家庭生活は、安らぎのない、惨めなものであった。廃太子だけでなく、すべての皇子達が父にそむいた。後宮では、その母親たちの、熾烈な争いがつづいていた。皇女たちはどうだったのか。60歳を過ぎると、帝の健康は日増しに衰えていった。

1722年（康熙61年11月）康熙帝の臨終の枕もとに、呼び集められた8人の皇子と、大臣の降科多<sup>ロンコド</sup>だけがい。死の間際に、降科多だけが側に呼ばれて、後継者指名の上意を伝えられた。指名されたのは、意外なことに、第四皇子の胤禩<sup>いんしん</sup>であった。胤禩は、すでに45歳になっていた。彼が清の第五代皇帝雍正帝である。

雍正帝の即位について、陰謀説が世間で囁かれた。雍正帝に買収されたロンコドが嘘をついたのだというこらしい。本当の事は分からない。

雍正元年（1723年）雍正帝は46歳である。即位後すぐ、ロンコドを誅殺し、第八皇子は「犬」、第九皇子は「豚」と改名させ、それぞれ独房に監禁、雍正4年、二人はつづいて病死した。第十四皇子への迫害など、彼には嗜虐性<sup>しやくせうせい</sup>があるといわれるが、しかし、第十三皇子を大切にしたり、学問、文芸に通じ、とくに禅学に造詣が深く、また思いやりの深い君主と取沙汰された。これらの矛盾した評価や行動は何を意味しているのか。彼の残酷なまでの行動は、当時の、朝廷や官界や社会の現実を知らなければ、理解することはできないと思われる。



雍正帝像

雍正帝は、「数千年の伝統を有する中国の独裁政治の最後の完成者である。」（宮崎市定）といわれる。

そして、清朝の政治方針は大体この時代に確定された、ともいわれる。雍正元年8月、雍正帝は「太子密建の法<sup>たいみっけんぽう</sup>」を考案した。

康熙帝が、はやばやと皇太子を立てたことから、皇帝の座を保証された皇太子が皇帝としての修養の努力を怠り、専横になり、酒色にふけったり、皇帝派と皇太子派という派閥ができ、皇太子が政治ボス化し、早く皇帝になろうとしてクーデターまで画策したことや、自分の皇位継承が陰謀だと囁かれたことなどの教訓から考え出された、後継者指名の制度である。

皇帝は生前に後継者を公表せず、意中の後継者の名前を書いた勅書<sup>せうし</sup>を印で封印して、紫禁城<sup>しきんじょう</sup>の乾清宮の玉座の正面に掛けられた「正大光明<sup>せいだいこうめい</sup>」の額の後ろにのせて置き、皇帝の死後、衆目の前で開封し後継者を決める方式。この方法で、清朝を通じて暗愚な皇帝が出なかったといわれるが、唯一の例外が乾隆帝のした立太子である。

「太子密建の法」は皇帝独裁を強化するための方法でもあった。



乾清宮の玉座と「正大光明」額



雍正帝は中国を完全無欠に統治することのために生きた。彼は漢文化を愛好し、中国流の文化人になり、また、中国流の独裁君主になろうとした。そのために、朝早くから深夜まで働き通し、在位13年で、ついに病にたおれた。過労死と思われる。彼は「善意にあふれた悪意の政治」（宮崎市定）をしたといわれる。独裁政治の限界か？

独裁とは聞こえが悪いが、それは、特権は皇帝の独裁権だけで、その他の特権階級を否定し、万民は皇帝の下に全て平等という制度である。よって、それまで差別されていた地方の賤民も解放された。当時の中国においては、最も優れた政体だったと思われる。宮崎市定は、中国の広さが独裁制を生み発達させ、またその無力さを証明した、といっている。その広さが皇帝独裁の敵であつたが、最大の敵は官僚機構であつた。「中国近世の歴史は独裁君主と官僚との絶えざる暗闘の歴史である。」（宮崎市定）雍正帝は強靱なる神経で官僚と闘いつづけた。

**軍機処の創設**（私設秘書室として情報を管理し、独裁権を強化した。）

外モンゴルでジュンガル部がふたたび国境方面を侵し始めた。これに対処する軍の作戦指導のために、雍正帝によって設置されたのが軍機処である。軍事の迅速と機密保持のため最も信頼する官僚数名を常駐させ、胥吏しよりはいっさい置かず、そのかわりに軍機章京ぐんきしやうけいという書記官を置いた。重要案件は皇帝と軍機大臣が合議で即決し、即座に下部へ伝えられた。

軍機処はこの戦争が終っても存続し、やがて、内閣にかわって、国政の最高機関となり、内閣は形式的な事項のみを処理する、有名無実な存在となつていった。

はじめから、雍正帝は皇帝独裁権力を強化するためにこれを設置したものと思われる。

※胥吏とは、官に対して吏ともいう。官は科挙に合格した高等官で、吏は官庁の下級職員である。吏には民間の希望者をつのつて充てた。官庁の窓口業務は彼らが担当した。吏は、官と違って、定員も任期も国家からの俸給もなかった。それで、一般人民から手数料をとって生活費としていた。この手数料が賄賂と区別がつかず、民衆を苦しめた。また、地方のボスや官僚と結託してさまざまな不正を働き民衆を苦しめた。

**奏摺の制度** この制度は康熙帝のころからあつたが雍正帝はこの制度を拡張した。

一般的な、中央政府と地方の省との連絡は、「題本だいほん」という公文書で行なわれた。それは、省の総督や巡撫じゆんぶからの文書は中央政府の六部と内閣で処理し、その後、天子の裁決を仰ぐという流れであつた。

「奏摺」は、地方から直接、天子個人へ文書を送る非公式な親展状の制度である。雍正帝は、正確な情報入手し、報告文から、その官吏の人物を観察するのが目的で考案したというが、官僚の一人一人を、直接、指揮しようと考えたのである。赴任した地方官は必ず奏摺を提出しなければならなかった。皇帝は毎日毎夜、数十通の奏摺を読み、朱墨で返事を書き続けた。「これほど勤勉で、良心的な帝王は・・・世界の歴史上にもいないと思われる」（宮崎市定）といわれている。後に、これらの親展状の中から、政治の参考になりそうなものを選んで、『雍正硃批諭旨しゆひしゆひ』百十二冊として出版させた。この数倍の手紙の束が宮中に山と積まれていたという。

手紙の内容は、地方官の人事、人物評価、評判、農作物の豊凶、天候や災害のことなど、政治に関わるあらゆることの報告や、そのことに関する地方官自身の考えであつた。帝は、人民の生活、治安の良否、経済の状態を最も知りたかつたようである。

雍正帝の辛辣な悪罵の一部をみてみよう。

- ・・・馬鹿につける薬はないとはお前のことだ。
- ・・・木石のように無感覚で人間とも思えない奴だ。
- ・・・無学で無能で欲深で見当りがいいだ。
- ・・・大山師の大嘘つきの誤魔化しやの詐欺師め。
- ・・・恩を知らず義を知らず、化け損なつた古狸め。

雍正帝は内政改革（朋党の禁止令・財政改革・養廉銀の制度・地丁並徴ちていへいしやうという租税制度の改革など）を通して官僚の綱紀肅正や財政整理をやりとげ、民衆の平安を実現し、国庫を豊かにした。ここでは詳しくは述べない。



「雍正硃批諭旨」部分  
台北故宮博物院蔵



軍機処（乾清門の西、隆宗門のそばにある）



「雍正帝行楽図画冊」より  
漁師にふんして物思いか。



「雍正帝行楽図画冊」より  
修行僧になったつもりか。



雍正帝 トラ退治



西洋人のようなカツラで！



「雍正帝行楽図画冊」より  
満洲族の衣装で、偉そうに。



「耕織図画冊」より 農民になって。

雍正帝は堅物のように見えるが、ユーモラスなところもあるようだ。いろんなコスチュームを着て、モデルになっている。

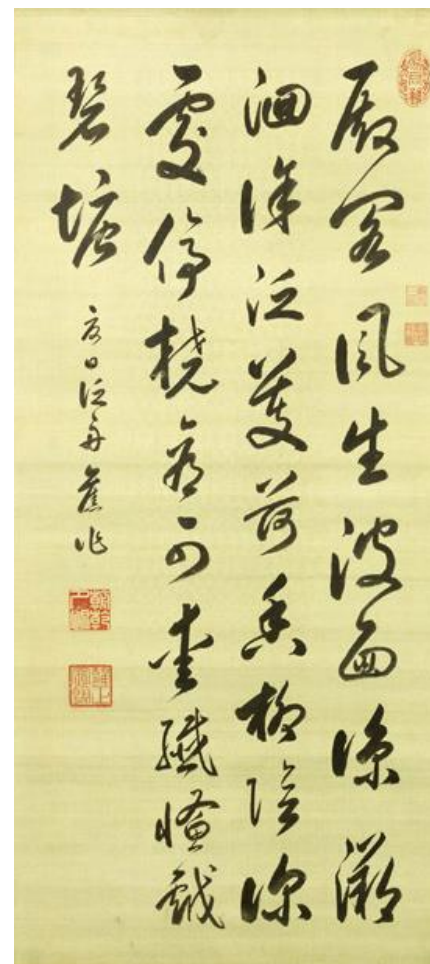


雍正年間「粉碎桃花紋直頸瓶」  
高さ 37.6cm



ほうろうさいばいじゅもんきら  
雍正年間「琺瑯彩梅樹文皿」景德鎮窯  
東京国立博物館蔵

絵付け磁器の最高峰。画風は精巧細緻をきわめる。白磁に七宝の技法を使った文様。  
宮中用の陶磁器には、雍正帝の端正謹厳な人となりが見られている。



雍正帝「草書夏日泛舟詩」行草書  
七言律詩 140.3×62.2cm 北京故宮博物院蔵

筆鋒が強く鋭く、端正。その人となりを見現わしている。

「殿閣風生波面涼 微洄徐泛舟詩」

理由がよく分からないが、1723年（雍正元年）雍正帝は、朝廷奉仕者以外の宣教師をマカオに追放した。つづいて、1724年（雍正2年）雍正帝はキリスト教の布教を全面禁止した。中国人の儒教的習慣や皇帝を神と同様に奉らないとか、雍正帝の皇位継承に反対したとか、さまざまな理由があげられている。  
雍正帝は戦争を好まず、人民への思いやりが深いといわれている。性格は、ひっこみ思案、内気、用心深い、自信家、負けず嫌いで勤勉、涙もろいなど、当時の典型的な満洲人ともいわれている。  
雍正帝は皇子のころから、歴代の法帖を広く臨書し、書も上手であったが、書画作品に捺印したり、題詠したりすることはほとんどなかった。皇帝の趣味か、雍正帝時代の芸術は、典雅で精緻である。宮廷御用達に限るが。



雍正期を理解するには、庶民の暮らしぶりを見るのが良い。それには『鹿洲公安』が参考になる。これは、雍正帝時代に、広東省の知県であつた藍鼎元のかかわつた、民事・刑事事件の、捜査と裁判の記録である。『雍正硃批諭旨』は高官たちとのやりとりだったが、ここには、官僚以下の人びとの末端の出来事が書かれている。事実は小説よりもドラマチックである。平凡社の東洋文庫に宮崎市定の抄訳がある。

雍正帝は、官僚と資本家にとつて、窮屈で、煙たい存在だった。早く死ねばよい、と呪われていたようだ。1735年（雍正13年10月）ついに病にたおれた。57歳。毒殺との説もあるが、おそらく、過労死であろう。

雍正帝の第四子の乾隆帝が25歳で即位した。雍正帝が考案した「太子密建の法」による最初の皇帝であるが、雍正帝は最後に大きな失敗をした。乾隆帝が祖父の康熙帝に溺愛されたからか、大馬鹿を選んでしまったのである。

一般に、乾隆帝時代は清朝の絶頂期だといわれる。康熙帝、雍正帝によって成し遂げられた内外の安定と、豊かな財源を基に、中華文明の集大成といわれる故宮の文物の蒐集や『四庫全書』の編纂、『三希堂法帖』などを作らせた乾隆帝は、偉大な中国文化の体現者であり、その保護者であるといわれる。また、60年以上の治世で、領土を即位前の2倍にし、中国史上最大の国家にした。その間、比較的天下泰平であつたので、人口も、退位するころには即位したころの2倍の4億ほどに増えた。

乾隆帝は父に反し、祖父康熙帝時代の寛大な政治へ大転回した。官僚の私欲を認め、資本との結合を許した。官僚階級に溶け込み、異民族国家であることを忘れ、満洲人であることを忘れ、清朝末ごろには、漢民族の中に吸収され、満洲人は消滅した。

10回の外征、無益な人命の損失、膨大な軍事費による消耗。彼は旅行好きで、15回の巡行を行つたが、贅沢三昧にふけり、そのうち6回の南巡は、1回が4、5カ月にもなり、膨大な国費を消費した。目的は視察にかこつけた遊興で、巡行先の人民に大変な負担を強いることになった。故宮の文物の蒐集も、考えてみれば人民の税でまかなわれたもので、人民の望むところではなく、芸術の保護者ぶるのもいいかげんにしてもらいたいと、人民は感じていたのではないか。大文化事業も本当の目的は思想統制であり純粹な学問芸術への愛情からではなかつたと思われる。「文字の獄」のほとんどが乾隆時代に集中している。また、皇帝の浪費癖も大きい。

政界はしだいに腐敗し、賄賂が公然と行なわれた。乾隆帝の寵愛を受けて、異常に出世した和珅が軍機大臣として専横の限りをつくした。兵を私物化し、公金を横領し、彼の一言であらゆる不正がまかり通つた。彼は、いくつもの大臣を兼任し、23年間にわたり、やりたいほうだったという。家臣が諫めても皇帝は知らぬ顔をしていた。寵愛の理由はなんだつたのか。皇帝はアヘン中毒で、和珅からアヘン購入の資金をもらつていたという説がある。

1795年（乾隆60年）85歳の乾隆帝は、「太子密建の法」をやぶり、15男の嘉慶帝に譲位した。乾隆帝は位をゆずつたが、太上皇として4年間君臨し、老害をまき散らした。その間、嘉慶帝は名前だけの皇帝であつた。

1799年（嘉慶4年）乾隆帝が死ぬと、嘉慶帝は和珅を逮捕し自殺を命じた。没収された和珅の財産は当時の国家収入の十数年分にあたるといわれた。世界一の富豪であつたらしい。



和珅



晩年の乾隆帝



乾隆帝 1736年 カスティリオーネ画

宮廷画家郎世寧 (1688~1766年) 本名はジュゼッペ・カステイリオーネ。

イタリアのミラノ出身のイエズス会修道士で画家。円明園の設計なども手がけた。

1715年(康熙54年) 北京に渡り、康熙・雍正・乾隆の三帝に仕えた。

1729年(雍正7年)『視学』を出版して、遠近法、明暗法などを解説し、西洋画の技法を中国へ伝えるなど、宮廷絵画に深い影響を与えた。

明代に、西洋から伝えられた明暗法や透視遠近法は、当時の中国人にとって、大変新しく珍奇なものであった。中国人には人物の描写において、影の部分に暗色を用いることは、縁起が悪いと思われ、受け入れられないことであった。

西洋画の影響を最も受けたのは清朝初期の宮廷画家たちであった。それには、郎世寧の力が大きかったといわれる。彼は皇族の子弟らに西洋絵画を教えた。乾隆帝もこどもの頃、彼に習っている。

彼は50年にも渡り清王朝に仕えた。

当時、郎世寧などの宣教師が宮廷画家として仕えていたが、宣教活動が本来の目的であった。彼らは皇帝の歓心を買うために画家としてイエズス会から派遣されたのである。



郎世寧「百駿図巻」1728年(雍正6) 絹本着色 94.5×776.2cm 台北故宮博物院蔵



「百駿図巻」部分



郎世寧「仙萼長春圖冊」より 台北故宮博物院蔵

## そのころ世界は

清朝の初め頃、西洋では、ルネサンス運動と宗教改革運動が一段落した頃であった。

三世の春の時期、西洋では、最も遅れていた西北ヨーロッパのイギリス、フランス、オランダなどが台頭してきた。イギリスで産業革命が起こった。アメリカ合衆国がイギリスから独立した。フランスではフランス革命が起こった。西ヨーロッパは、はやばやと近世の変革を終え、経済革命、政治革命をやりとげて、さらに新しい文明の段階に進み、人類の先頭に立ったのである。

細胞、細菌、電気、引力などの科学的発見があいつぎ、電池、蒸気機関車、自動車、蒸気船、紡績機などが、つぎつぎに発明され、ヘンデルや、ドイツ圏では、バッハやハイドンやモーツアルトやベートーヴェンが活躍していた。

西洋の端で起こった革命の波は、否応なしに、世界をのみこんでゆく。

※雍正帝に関しては、宮崎市定著『雍正帝』中公文庫に詳しい。中に「雍正硃批諭旨」の解題がある。





羅聘筆 鄧石如像

碑学派の開祖・鄧石如 乾隆8年（1743）～嘉慶10年（1805）

清代後期は「考証学」が勃興し、古代に目が向けられた。考証学は清朝の儒学の中心をなす学問で「实事求是」をスローガンに「訓詁学」に復ることを主張した。「訓詁学」は古代の言語の意味を研究する学問で、後漢の「古文学」において特に発展した。古代言語の意味解明のための手段として、小学（文字学）、音韻学に通じることが必須とされ、そのため古代文字を研究する「金石学」も盛んになった。これらの学問の古代復興の空気に刺激されて、唐宋以来の主流であった王羲之の風に代わり篆書体・隸書体に関心を向ける書家たちが現れた。

※「考証」とは、客観的な証拠をあげて事実を明らかにすること。考証学の中心は経書研究。経書の根幹は『易』『書』『詩』『礼』『春秋』の五経である。 ※「实事求是」とは、事実によって真理を明らかにすること。

※「訓詁」とは、古代の言語を解釈する意。訓故、故訓ともいう。

※「金石学」とは、古代の金属器、石刻に刻された銘文や画像を研究する学問。

鄧石如は、清朝中頃の書家・篆刻家である。碑学派の開祖、篆刻の鄧派（新徽派、後徽派）の開祖といわれる。

初名は琰、後に字の石如を名とし、字を頑伯とした。号は完白山人、笈遊山人など。安徽省懷寧県集賢閣の白麟坂に生まれた。父の名は一枝。号を木斎という。博学で、書や篆刻をよくした。あちこちの家で、住みこみの家庭教師をして生活、三年間も家に帰らないときもあったという。

家は、たいへん貧しく、九歳のとき一年間だけ、父から読書の指導を受けたただけで、科擧の学習には専念できず、ほとんど独学で一家を成した。篆刻と隸書は幼いときから学んだらしい。餅や薪を売り歩いて家計の足しとしたらしいが、やつと毎日おかゆを食べられた、という状態であったという。

十八歳のとき同じ村の潘氏と結婚したが、すぐに死別、ついで塩城の沈氏と再婚し、息子一人と三女を得たが、沈氏は息子が六歳のときに死に、つづいて懷寧の程氏と再婚したらしい。二十歳ころには、塾を開き、子どもたちに文字を教えていたという。やがて、二十歳から三十八歳頃まで、刻した印と書を書いて歩く放浪の生活を始めたようだ。盗賊退治の挿話があるが、超人的体力の持主のようである。

乾隆43年（1778）10月、三十六歳の石如は、対印を作った。

「太羹玄酒」印の側款に「汗をふるって刻刀を動かして印を作ったが、考えてみると、私は次つぎと旅をしつづける落ちつかない生活をしているのである。この世の誰に、この印を持ってももらたいたいというのであろうか・・・」と記している。「太羹」とは、調味料を使わない肉汁のこと、「玄酒」とは水のこと。

「聊浮游以逍遙」は『楚辞』の「離騷」の一節で、「しばらく、あちこちとめぐり歩き、またさまよい歩いた。」という意。行くあてのない自分の心境を、屈原と重ね合わせて表現したのと思われる。



聊浮  
游以  
逍遙



太羹  
玄酒

32歳のとき、寿州に行き、寿州書院の院長の、書家梁巖<sup>りょうけん</sup>に出会った。梁巖は石如の印や小篆の書に感動して、さらに書法を究めさせようと、旅費を用立て、江寧（南京）の梅鏐<sup>ばいりゅう</sup>のところへ行かせた。

梅氏は北宋以来の名門で、大変裕福であった。秦漢以来の、非常に多くの金石の拓本を所蔵していた。梅鏐は石如に惚れて、所蔵品をすべて彼に見せ、衣食や用具の費用を提供し、彼が書を究められるように惜しみない協力をした。以後八年に渡って、梅鏐のもとに通い、篆書に五年間、隸書に三年間、毎日、臨書に明け暮れ、書を究めていったという。



清素堂

乾隆45年（1780）の夏、梅鏐の依頼で、「清素堂」朱文長方印を作った。この時期の篆刻は徽派風で、石如の作風はまだ確立していない。これはまだ、皖派<sup>かん</sup>（徽派）の篆刻家梁裘<sup>りょうちゅう</sup>の系統の印である。石如は、はじめ 何震<sup>かしん</sup>・梁裘を手本としたようだ。



蘭  
為知己

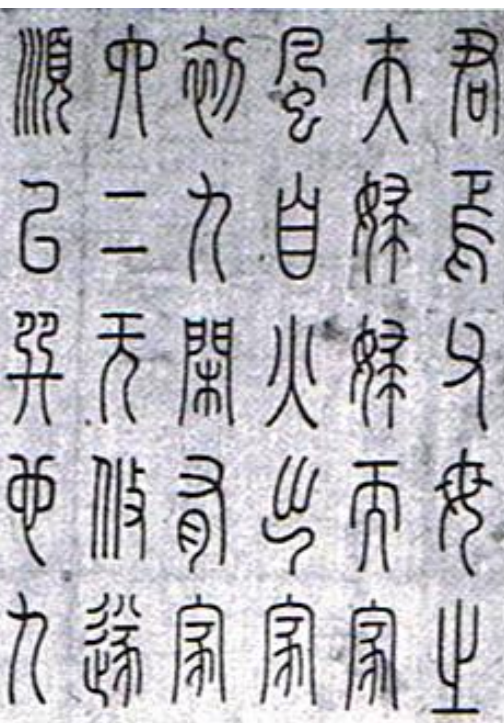
「蘭為知己」は同年の冬に作ったもの。「蘭を自分の心からの友人とする」という意、この世の中に自分を本当に知ってくれる友人がいらないという孤独な気持ちを述べたものである。

これは石如の前期の作品である。

鄧石如は次のように述べている。

「私は初め李陽冰を模範として学んだが、長い間にその長所と短所とを明かにすることができた。・・・そして、暇がある時には、コンパスで書いたようなまろい筆画と、さしがねで書いたように直角にまがっている筆画とでできている作品をさがして手本として、臨書して学んだ。」

石如が述べている通り、コンパスとさしがねで書いたような篆書である。



洪亮吉「篆書軸」部分

「三世の春」のころは考証学が発展し、篆隸を書くことが一般化してきた。当時、小篆の大家と言われていたのは、王澐<sup>わいしん</sup>・孫星衍<sup>そんせいえん</sup>・洪亮吉<sup>こうりょうき</sup>らであったが、彼らの小篆は配置が均等で、痩せ細って、型にはまり、一様で変化がなく、生命感に乏しい似非李斯<sup>えいせりし</sup>・李陽冰であった。彼らは、均等、均整第一だから、筆の先を切ったり、細い絹布を束ねて巻いたものを使って、力強さのない、同じ太さの筆画を書いて得意がついていた。かれらの書は形だけ洗練された、表面的で筆力のない、貧弱なものであった。



李陽冰「李氏三墳記」部分

玉筋篆<sup>ぎょくちよてん</sup>また鉄線篆<sup>てつせんてん</sup>と呼ばれる極度に変化をおさえた篆書。



鄧石如「周易・説卦伝軸」

乾隆45年（1780）5月



鄧石如が梅鏐のところで学んだもの

「石鼓文」、李斯の「嶧山碑」「泰山刻石」、漢の「開母廟石闕銘」「敦煌太守裴岑紀功碑」、蘇建の「裨国山碑」、皇象の「天發神讖碑」、李陽冰の「三墳記」「城隍廟碑」をそれぞれ百本を臨書したが、篆書が不十分だと感じ、『説文解字』を半年かけて二十本手写したという。さらに、殷代・周代の鐘鼎文、秦漢代の瓦当・碑額などを、毎日夜明けに起きて墨をすり、夜まで書いた。五年で篆書が完成した。それから、漢代の八分にかかった。「史晨前後碑」「畢山碑」「白石神君碑」「張遷碑」「潘校官碑」「孔羨碑」「受禪碑」「大饗」など、それぞれ五十本を臨書し、三年で八分の書が完成した。

鄧石如は、玉筋篆に命を盛り込むために、柔毛筆を使い、懸腕、逆入、中鋒の筆法で、篆隸を新しく生まれ変わらせたのである。彼は、草書の筆法で篆隸を書き、篆隸の筆法で行草楷書を書いた。

梅鏐の世話になって八年たち、鄧石如の学問は完成したが、梅家は傾き始め、しだいに貧乏になり、石如の世話が難しくなってきた。それで、石如は梅家を出て、売書、売印をしながら、旅をつづける生活に帰った。

乾隆46年（1781）の秋、石如は、焦山に登り、「瘞鶴銘」を見ている。これは、石如の楷書に影響を与えていると思われる。

乾隆50年（1785）、鄧石如は黄山にかけ、三十六峰を歩きまわり、雲海の変化を心ゆくまで味わい、黄山の石でいっぱい大きな袋をせおって、山から帰り、歙県へ出かけた。彼は、程瑤田の紹介状を持って金榜に会いに行ったようである。程瑤田は儒学者で、鄧石如の書と篆刻を高く評価していたようだ。石如は38歳のとき揚州で彼と知り合ったようだ。

乾隆51年（1786）、著名な学者であつた張惠言に会う。彼のために「司馬溫公家儀」を書いた。この張惠言につれられて、石如は金榜に会いに行ったようである。



鄧石如「司馬溫公家儀」

乾隆52年（1787）金榜は鄧石如を太子の太傅である、戸部尚書曹文植に紹介した。乾隆55年（1790）乾隆帝の八十歳の誕生日を祝うため、曹文植は六月北京へ向けて出発、石如もゆくことになった。

北京へは、ひとりで向かうことを許してもらったようである。そのころ、妻が男子を出産、子は難産で死に、母は大病になった。また、父が四月に亡くなった。彼は、葬式をすませ、寝具と衣服をかついで、天台、雁蕩を登り、新安江に向かい、黄山三十六峰を歩きまわり、途中、焦山を訪れ「観海」と題する詩を作った。



乾隆53年（1788）当時55歳の羅聘（らへい）に会う

「写真不貌尋常人」

真を写して尋常の人を貌（かた）どらず。

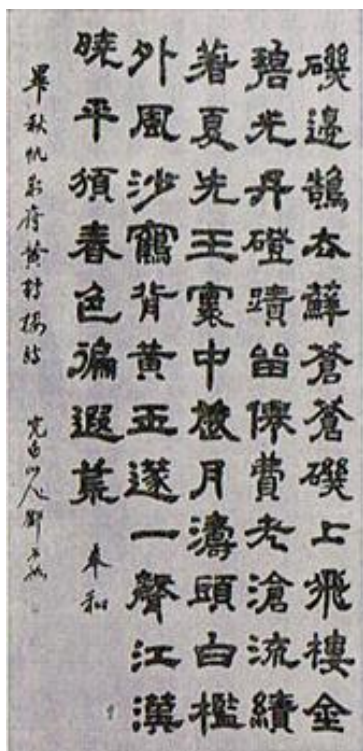
側款に「私と羅聘とは偶然に都で会った。羅聘は私に登岱図（とたいず）を描いてくれた。そこで、この印を作ってその絵のお礼とした」とある。



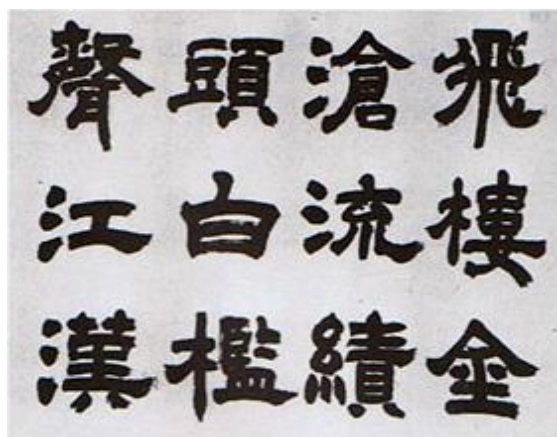
「鉄鈞鎖」とは筆法の名。

側款に「羅聘は竹を描くの、この三字の方法を用いるが、私が印を作る時にも、この方法を用いる」と述べている。

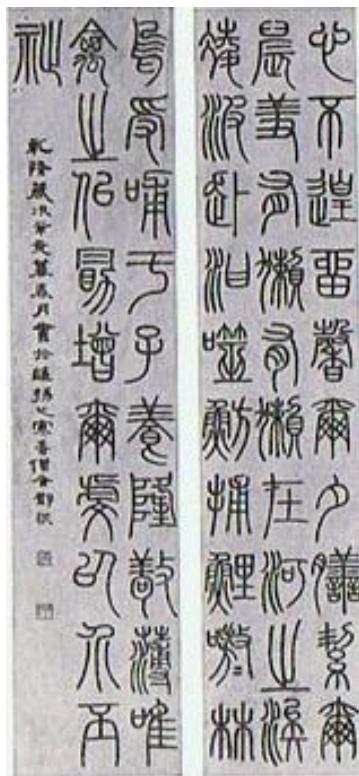




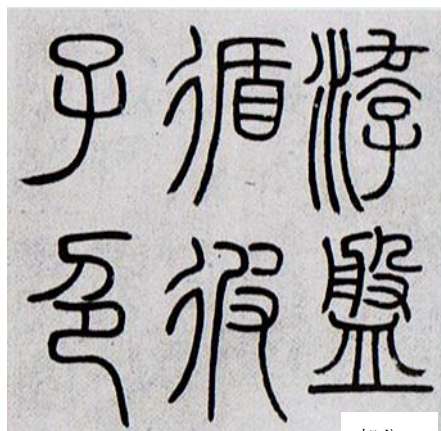
鄧石如「黃鶴樓詩軸」1792年12月



部分

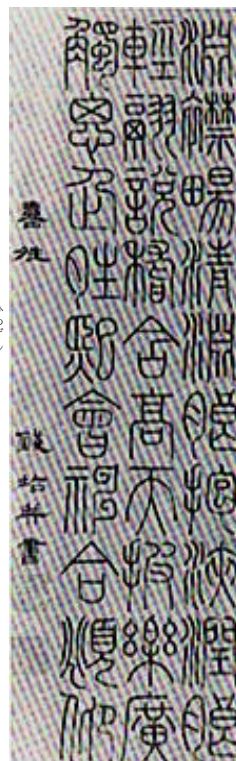


鄧石如「詩經南宮亥篆書屏」部分  
乾隆57年(1792)



部分

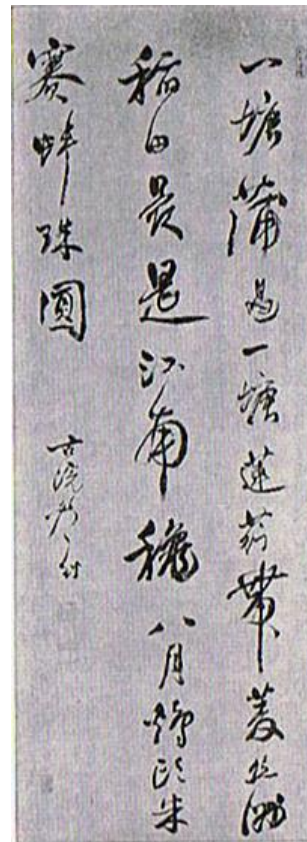
乾隆55年(1790)畢沅の私設秘書となり、武昌に三年間滞在したが、ここでも銭坵、孫星衍などとうまくいかず、51歳の冬(乾隆58年)郷里に帰ることになった。畢沅は田地と家を用意して、石如が将来の心配がないようにはからったという。



銭坵の篆書

北京に居られなくなった石如は、また、曹文植の紹介で旅装も調べてもらい、両湖総督の畢沅の所に送られることになった。

北京についた鄧石如は、相国の劉墉や陸錫熊らの名士に会った。書家として有名な二人は、石如の書を見て「千数百年このかた、このような立派な作品はなかった」といって大絶賛した。しかし、その後すぐ、劉墉は左遷され、勢力を失い、失意のうちに亡くなり、陸錫熊も急死した。そのころ、北京では、篆隸を書く者は、内閣学士の翁方綱を宗家と仰いでいた。翁方綱は銭坵の鉄線篆が李陽冰以来の伝統的な正しい筆法の篆書と考えて、銭坵の篆書を「神授」の妙技と絶賛し、石如の隸書や草書の筆法を取り入れた反伝統の篆書を翁方綱は認めなかった。



鄧石如「鄭板橋詩軸」

国立東京博物館蔵  
鄭板橋の詩を行草で書いた作。  
53歳以前の作か？

一塘の蒲を過ぎれば 一  
塘の蓮 あさざと菱が  
稲田に満つ 最も是れ  
江南の秋八月 おにば  
すの実のような米つぶは、  
はまぐりから出る真珠の  
円きにくらべられる

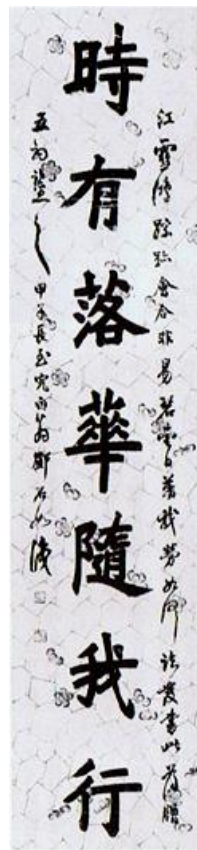




鄧石如「行書」



鄧石如「五言聯」1804年



鄧石如「楷書」

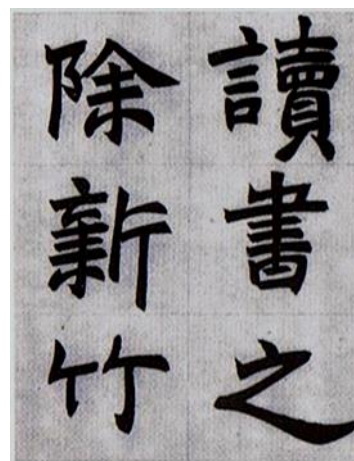


鄧石如「七言聯」1804年



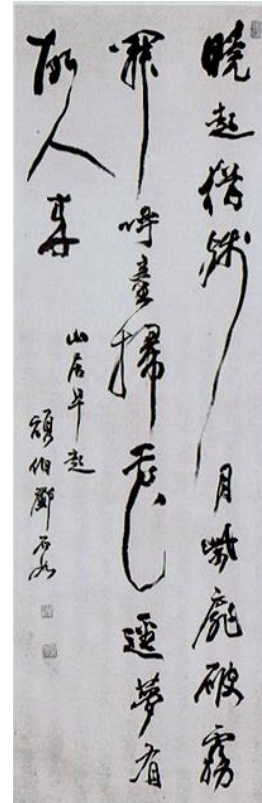
先生之風山高水長

「先生の風、山のごとく高く、水のごとく長し」  
出会ったころ、包世臣に送られた印。



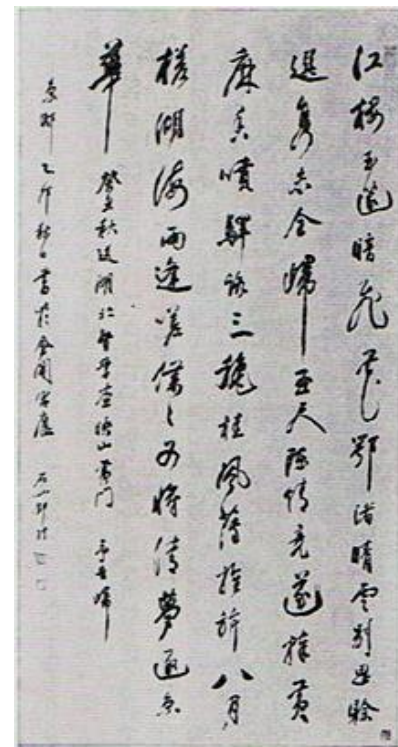
鄧石如「讀書樂六屏」部分

嘉慶7年（1803）正月、妻の沈氏の女が39歳で死んだ。この年、鎮江で28歳の包世臣に出会った。そのとき鄧石如は60歳であった。包世臣はここで十日余り石如から指導を受けた。彼は石如から次の二つを学んだといわれる。「字画が疎なる所では、馬を走らせることができるくらいに広くあけ、字画が密なる所では、風をも通さないくらいにつめて書き、常に白を計って黒をおくときには、すばらしい趣きが出てくる。」



鄧石如「行書五言絶句軸」

嘉慶元年（1796）以後、名を石如、字を頑伯、号を完白山人とした。郷里で新年をむかえたようである。



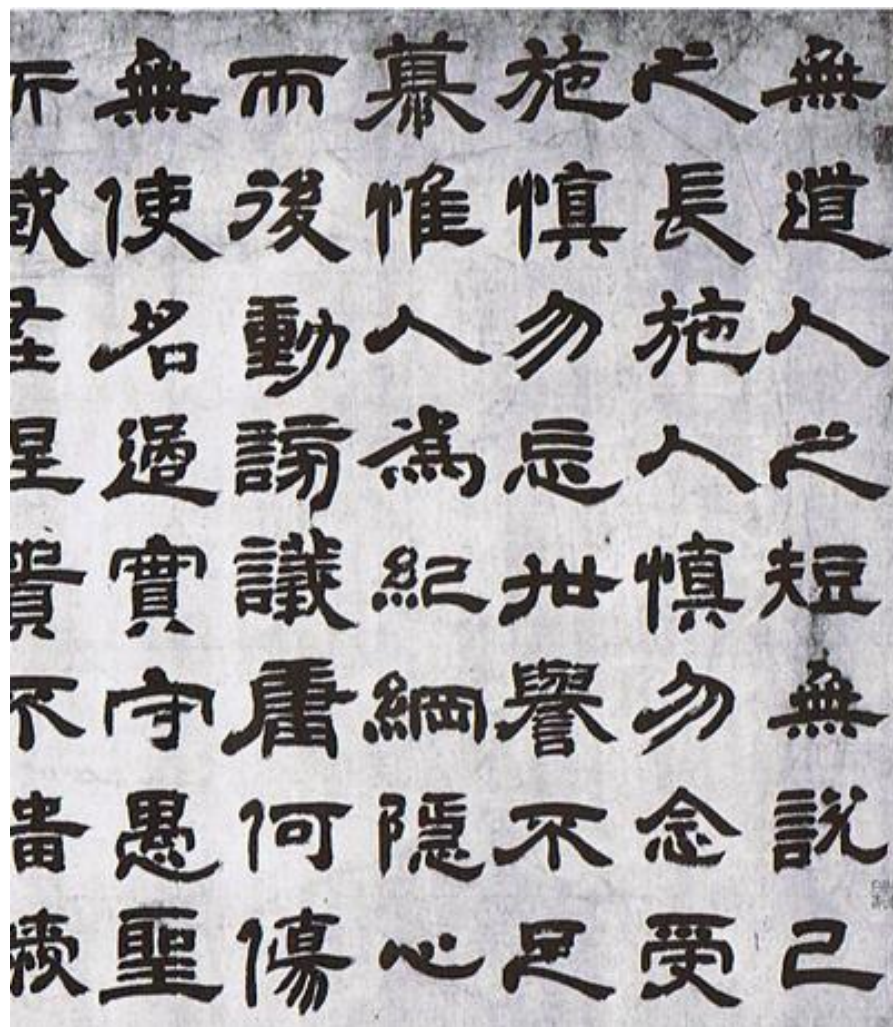
鄧石如「贈查映山自詩軸」草書（1793）

最後の二句、  
「湖海兩逢蹉僕僕」「又将清夢逐京華」  
湖海 両ながら 逢蹉すること僕僕たり、  
また清夢を將て 京華を逐わん。  
「私たち二人は、どこへ行ってもわずらわしい世の中であることを、嘆きあつたけれども、また大きな希望をもって自分の夢を追いつづけることにしよう。」大きな希望をもって新しい世界を求めよう、ということ。「清夢」は大きな希望。「京華」は自分の夢。



包世臣は生涯にわたり石如を師と仰ぎ敬愛した。石如没後19年目に『国朝書品』を著し、石如の書を清朝第一と絶賛し、これにより、ほとんど無名だった石如は一躍有名となった。

鄧石如は篆刻の伝統復古主義を打破し、独自の印法を確立し鄧派を興して、篆刻の地平を切開いた。彼は性格が清らか過ぎて、人づき合いがへたで、出世はしなかったが、彼の、生き方と書と篆刻は多くの才能に受けつがれ、現代の書と篆刻に大きな影響を与えている。



鄧石如「隸書 崔子玉座右銘」部分 嘉慶7年(1802)



鄧石如「篆書 白氏草堂記六屏」部分 最晩年作